

# 秦氏と妙見信仰

八幡 昭海

## 一 妙見信仰と秦氏の水上交通

(一) 日本靈異記を中心にして

### 妙見信仰とその土地

大和国高市郷波多の里： 現在の  
明日香村畑又は、高市郡高取町あたり  
出身の呉原忌寸名妹丸がここの出身、  
呉原の姓は太田亮氏の姓氏家系辞典  
では倭漢の族であるが、倭名類聚抄に

よれば、波多は秦で秦氏の住んでいた  
所で倭漢氏の呉原忌寸名妹丸もそこ  
に住んでいた。その呉原忌寸名妹丸の  
話である。

呉原忌寸名妹丸は高市郷波多の里  
人である。魚を獲るを業として、延暦  
二年（七八三）の甲子の秋の八月十九  
日の夜に、紀伊国海部郡の伊波多岐島  
と淡路国との間の海に到りて、網を下  
ろして魚を捕っていた。三隻の舟に九  
人が分かれて乗っていたら、大風が来  
て波が三つの舟を襲って八人が溺死  
した。名妹丸は海に漂っていたが、心

に妙見菩薩を念じて、我が命を助けてくれれば妙見の像を作りますと祈った。海に漂って力尽きて明け方に蚊田の浦の草の上で気がついた。

舟は沈み波に漂ったが妙見の像を作ることで命が助かったということだ。秦一族の居住する所にあった妙見信仰を同じ所に住む呉原忌寸名妹丸も同じ信仰を持っていたのだと思われる。大和高市郡に住む秦氏が妙見信仰を持っていた時、赤穂市坂越の大避神社や宝珠山妙見寺の存在が気にかかる。大避神社は秦氏の本拠地が播磨

の坂越の大避神社である。(田中久夫著 秦河勝と播磨の坂越より)

そして宝珠山妙見寺は空海の師の観操が妙見を刻んだ(菌田香融、古代仏教に於ける山林修業とその意義)との伝説、江戸時代の「播磨鑑」「播磨万宝知恵袋」にも行基開基で妙見は勤操僧都の作であると記されている。勤操は「元享釈書」巻第二によれば「姓秦氏和州高市郡の人とあって、前にも記したように大和国高市郡に秦氏関係の人の居たことになる。宝珠山妙見寺の住職さん(伊藤 正幸師?)のお

話では奥の院に明星池があり、ここで  
行基は虚空蔵菩薩を刻んだ。そこに安  
置されている虚空蔵菩薩の前で虚空  
蔵菩薩を祀る求聞持法を修した。その  
お礼に虚空蔵菩薩を祀る石塔と妙見  
菩薩を石に刻んだとのことである。勤  
操はこの地に来るまでに妙見菩薩の  
存在を知っていたことになる。

大避神社、生島、妙見寺とからめて  
秦氏と坂越の深い関係がうかがわれ  
る。(八幡記)

## (二) 妙見信仰と秦氏

日本霊異記の説話より妙見菩薩と  
ハタの地名の関係のあるところから  
その例を示す。

### 一 能勢妙見

摂津国豊島郡秦上郷、秦下郷、今の  
池田市巨大古墳があり、秦氏のもの  
とされる。

アヤハトリ、クレハトリ、綾織、  
呉服と訳され、呉(中国)より坂上氏  
の始祖阿知使

主、都加使主らによって朝鮮經由日

本に來た織物を作り染めて仕上げる技術のある女性集団のことで、新修池田市史によると阿知使主、都加使主を祀るにあたり、専従の秦氏の社に併祀して自族の織姫伝承の神としたと。

今の野瀬妙見は多田氏によつて祭られたとするが、元は秦氏が祭つたもの。

## 二 星田妙見

大阪府交野市星田（河内国茨田郡幡多郷）星田妙見宮（小松神社）の略縁記によると

空海（勤操の弟子）が虚空蔵菩薩求聞持法を修した所（坂越妙見寺と同じ）星が下がつて来てここに妙見菩薩を開眠したとある。（妙見Ⅱ北極星）

この現交野市星田は西隣が寝屋川市、ここは秦、太秦、川勝などの町名が残っており、倭名類聚抄の河内国茨田郡幡多郷に当たる。河内名鑑に「秦村、太子の臣下秦川勝此所に有」と記載あつて、現在も川勝山太秦寺や秦河勝の墓と伝えられる五輪等がある。茨田郷という名は、古事記の仁徳天皇条に「秦人を役（えだ）ちて茨田堤及び

茨田三宅を作り丸邇池（わこのいけ）、  
依網（よさみ）池を作り又、難波の堀  
江を堀りて海に通し又、小椅江（をば  
しのえ）を堀り又、墨江の津を定めた  
まいき」とあることから土木工事に関  
わった事、秦氏の子孫が姓を変えてい  
たとの記述もある。

祈った所、風が止み命が救われた云々。  
平安初期には航路の安全を妙見に  
祈ったことが記されており、阿姿縛抄  
には妙見には風雨順時の功績ありと、  
妙蓮華経普門品通称観音経に述べら  
れている。

航路の安全を祈る対称として秦氏  
が妙見信仰をしたかは、秦氏は機織り、  
鋳物採集、酒作りなどをしたが、これ  
らを取引するには運送が必要で各地  
に住む秦氏が分担した。それには舟の  
利用が必要であった。日本霊異記にも  
記（マルコポーロの東方見聞録より先  
に書かれた中国旅行記）に中国への船  
旅の折に海が荒れた時、観音、妙見に  
難波（大阪）は大和川、淀川を通じて

大和や京とつながり瀬戸内海を通じ  
て、山陽道、南海道、西海道とつなが  
っている。そして朝鮮、中国ともであ  
る。

であった。(野田美代子 神戸女子  
大平成一一年卒業論文)

赤穂坂越の妙見寺、大避神社、生島  
と秦氏出身の勤操(空海の師)秦河勝  
とつながりのある所で今も一〇月一  
二日(今は一〇月第二日曜日)に大避  
神社から生島への舟渡御が行われて  
いる。今は妙見寺は参加してないが、  
かつては大避神社の社僧として関わ  
っていた(神仏分離令によって分れ  
た)。航海安全の信仰のもと妙見寺

大避神社には船絵馬や船主の寄贈  
の石燈籠がある。西国から船が明石海  
峡を越えるのは当時大変で、室津、飾  
磨の東は風も強く海賊も出た。行基菩  
薩が設置した五泊地として河尻、大輪  
田、魚住、韓、室があげられるのに対  
し、赤穂の坂越は天然の良港であるの  
に公的機関がなかったとされている。

(大避神社が延喜式に記載なし)

平城京の時代、西国からの物資は難  
波に来て大和川を上り、途中から陸路

又は、川を行つたと考えられるが、  
所々に妙見菩薩を祀る社と秦氏の居  
つながつている。

住の跡が見られて、秦氏が西国から平  
城京への物資の輸送に関わり、守護神  
として妙見を祀つたことが見られる。

長岡京から更に平安京になるにつ  
れて、難波から淀川又、大輪田（尼崎）  
に役に立つもの。）

から神崎川を上り、途中淀川につなげ  
て輸送した。その方が近く流れも緩やか  
かであつた。

別に能勢の山に住む神が猪名川の  
河口迄来て能勢の山の杉の木で神功  
皇后の三韓征伐の舟を作つた話があ